



記入日 2014年1月6日

1. 概要

実践団体名	仙台市立 南吉成 中学校		
連絡先	022-277-4377 (南吉成中学校)		
プランタイトル	中学校と地域が協働する防災教育活動プラン		
プランの対象者※1	中学生、地域住民、教職員、保護者・PTA	対象とする災害種別※2	災害全般

※1 別紙「記入上の留意点」の1. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※2 別紙「記入上の留意点」の2. 項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント!】

本プランは、少子高齢化や核家族化が進み、住民の絆が薄れつつある地域において、中学生が主導する防災・減災の教育活動を実践し、自然災害に対する地域防災力を高め、持続可能な地域社会を担う人材を育成する。実践では、中学生の教育活動に住民等の協力・支援を受けることで、地域を巻き込み、防災教育を通じて学校・地域・家庭の協働体制化を図り、地域活性化にも資する。更に本プランでは汎用性、継続性、発展性、有効性等の追究・検証を重ねている。

【プランの概要】

- ①中学生が主導する地域防災訓練：中学生が避難所開設・運営、炊き出し、集団避難誘導等の6班を担当し、町内会等の地域組織が各班を分担支援する形で訓練を実施する。
- ②津波被災農家に弟子入り体験：津波被災農家に苦難から立ち直るまでの講話をいただき、その後日に農作業を手伝い、交流活動を通じて農家の方々から生き抜く力の糧を学ぶ。
- ③校内・炊き出し調理コンテスト：クラスの生活班単位で実施し、災害用米炊き袋を使用するなどの条件の下、班でメニューを考え、競い合うことで炊き出しに関する知識とスキルを学ぶ。
- ④仙台復興シンボルイベントの支援：全国から観光客が来る仙台七夕等のイベントで、本校の2割を超える生徒・約70名が志願してゴミ回収や清掃の奉仕活動を行う。
- ⑤防災教育の学習成果発表会：3年生が10テーマに分かれて調べ学習した成果を、①の訓練日に住民や保護者、下級生などにポスターセッション形式で発表、質疑を行う。

【期待される効果・ここがおすすめ!】

防災教育の実践を通じて、地域貢献活動による奉仕的精神を培い、防災・減災の意識と行動力を高め、防災対応能力を育むことができる。そして、中学生が主導する地域防災訓練では、地域を巻き込む防災教育が災害時の自助・共助の方策を形作り、地域防災力の向上に資するものとなる。将来的には、この防災教育活動を通じて、地域防災を担う要となる人材が生まれ、生徒・保護者・住民など世代を超えた防災の協働体制が構築され、地域の活性化と安心安全な地域づくりに波及する可能性がある。本プランの継続は、これらの期待される効果とともに、住民間の絆を強め、持続可能な地域作りにつながる。

2. プランの年間活動記録 (2013 年)

	プランの 立案と調整	準備活動	実践活動
4月	今年度の計画等の検討作成	活動計画の決定	年間計画策定と活動内容の協議決定
5月	5/28 学校支援組織の発足	計画の協議検討	活動概要の説明と協力・支援依頼等
6月	被災農家等との連絡調整	協力先との渉外	農家等の協力先との協議・依頼
7月	○7/15 津波被災農家の講演 (1・2年生 212、保護者 132人参加) ○7/26 津波被災農家に弟子入り体験学習(除草作業) (1・2年生 198、保護者 10人参加)	農家と連絡調整を図り、体験学習の前に講演していただく。	○農家7人が地震・津波の体験と農業再生・復興への道のりを講話 ○津波で3Fまで浸水した校舎を視察し、震災当日の状況を現場で聴く。その後、綿花畑の除草作業を手伝う。
8月	○8/2 仙台七夕の清掃奉仕 ○8/6～8 七夕会場でのゴミ回収・清掃	仙台商工会議所と商店街組合の協力依頼と連絡調整	○希望生徒72人が七夕会場とその周辺の清掃活動を行う ○七夕開催の三日間、延べ70人の生徒が七夕会場の膨大なゴミを回収
9月	○生徒会と教員が地域防災訓練の企画・計画の検討	生徒会が企画し計画・準備、実行	生徒会と教員が11月の地域防災訓練の実施企画と計画等を立案・検討
10月	○10/4 校内炊き出し調理コンテスト ○10/18 ユネスコスクール東北大会で合唱披露と生徒がプレゼン発表 ○10/25 教育学・全国大会で生徒6班がプレゼン発表	○使い捨て器等の消耗品の購入 ○合唱の練習とプレゼン発表の指導 ○プレゼン作成の支援・指導	○1年生3クラスの生活班、18班が炊き出しメニューを考え、競い合う。 ○本大会にて東北各地の先生方の前で、1年生約100人が復興ソングを合唱、2年生2班が防災学習成果発表 ○全国大会に参加の先生方に、2年生6班が防災学習成果をプレゼン
11月	○11/15 中学生が主導する地域防災訓練 ○11/17 津波被災農家に弟子入り体験学習(収穫作業)と合唱披露	生徒会が実施計画・内容等を決定被災農家との連絡調整(今年の2倍の人数を受入)	○生徒会が中心となり、3年生が6班に分かれて訓練を実施(住民209人参加) ○1・2年生200人と保護者10人が参加し、午前に綿花を収穫、午後の収穫祭で仮設住民等200人に合唱を披露
12月	○12/3 仙台・光のページェント清掃奉仕活動	主催の青葉区役所との連携・協議	○希望生徒60人が開催会場とその周辺でゴミ拾い等の清掃活動を実施
1月	活動成果等の分析・検証	データ分析	検証による成果や課題等を抽出
2月	まとめと外部発信	報告書等の作成	教育実践の成果等を外部に発信(ユネスコスクール、防災教育チャレンジプラン等)
3月	次年度の企画・計画の立案	検討・協議	検証・改善の結果を計画に反映

3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号： ①】 ※3

S P(警視庁の要人警護をする警察官)にも準え
地域の子供から高齢者まで全てが地域の要人と捉え

タイトル	「南吉成・学校支援組織」の“MY・SP隊”発足、活動 (<input checked="" type="checkbox"/>)なみ (<input checked="" type="checkbox"/>)しなり 小学校・中学校 (<input checked="" type="checkbox"/>)スクール (<input checked="" type="checkbox"/>)プロジェクト チーム)		
実施月日(曜日)	5月28日(火)、9月24日(火)、11月14日(木)、15日他		
実施場所	本校・視聴覚室等		
担当者または講師	担当者の区分：会長・ 連合町内会長 講師等の区分：校長 所属・役職等：(組織側) 町内会長、交番所長、各団体等の長 (学校側) 校長、教頭、防災教育主任、生徒会の生徒など		
所要時間	会議：14:00～16:30、 活動等：放課後や長期休業などに活動		
プログラムのカテゴリ、形式※4	その他(防災教育の実践化を図るための学校支援組織の発足)		
活動目的※5	3 災害に強い地域をつくる ：地域の教育力や防災力を高める学校支援組織づくり		
達成目標	中学生と世代を超えた地域住民による安全・安心な地域づくり		
実践方法・進め方 (簡条書き またはフロー)	<p>これまで設置されていた「青少年健全育成協議会」の活動は、長期休業中の巡視活動や健全育成標語の募集・表彰、講演会の開催など、青少年の健全育成の活動を行ってきた。</p> <p>そこで、今年度の5月に右図の通り、「南中・学校支援組織」として拡充を図り、これまでの組織の目的に防災教育の視点を付加し、新たに参画する地域組織を含めて発足している。</p> <p>発足までに、新たな参画組織との交渉を重ねるとともに、既存組織の構成団体等にも説明して協力と理解を得てる流れで進めてきた。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>南中・学校支援組織</p> <p>既存組織「青少年健全育成協議会」を拡大 (既存組織の構成) (新たな参画組織)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; padding: 2px;"> ①防犯協会、②交通安全協会、 ③交通指導隊、④民生児童委員、 ⑤婦人会、⑥交番所 ⑦小中・健全育成委員会 ⑧小中・生徒指導担当 </td> <td style="width: 50%; padding: 2px;"> A. 体育振興会 B. 消防団 C. 婦人防火クラブ D. 老人会 </td> </tr> </table> <p>【組織目的】 青少年の健全育成を目指し、 学校・家庭・地域が協力・連携して、 広い視野から地域ぐるみ指導の充実促進を図る。</p> <p style="text-align: right; color: red;">防災教育の視点を付加</p> </div>	①防犯協会、②交通安全協会、 ③交通指導隊、④民生児童委員、 ⑤婦人会、⑥交番所 ⑦小中・健全育成委員会 ⑧小中・生徒指導担当	A. 体育振興会 B. 消防団 C. 婦人防火クラブ D. 老人会
①防犯協会、②交通安全協会、 ③交通指導隊、④民生児童委員、 ⑤婦人会、⑥交番所 ⑦小中・健全育成委員会 ⑧小中・生徒指導担当	A. 体育振興会 B. 消防団 C. 婦人防火クラブ D. 老人会		
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	地域の教育力や防災力を高めるために関わる地域の人的組織(6町内会長、民生委員、婦人会、消防団、PTAなど12組織)		
参加人数	会議の参加者：各組織の代表50名、 活動への参加者：各組織の所属者(本校学区の地域住民のほぼ全て)		
経費の総額・内訳概要	在校生の家庭からの協力金・約10万円と市からの助成金4.5万円		
成果と課題	【成果】世代を超えた地域防災力の向上や青少年の健全育成に資するなど、広い視野・分野から地域ぐるみで学校教育を支援 【課題】学校支援組織には、高齢者から働き盛りの方々まで幅広い年齢層が属し、会議等の設定が困難・共通理解不足が生じがち		
成果物	成果物としては、青少年の健全育成と地域防災力の向上を目指し、学校・家庭・地域が協力・連携して、広い視野と分野から地域ぐるみ指導の充実促進が図れていること。		

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ②】※3

タイトル	津波被災農家の方々による講演
実施月日（曜日）	平成25年 7月15日（月）海の日
実施場所	本校・体育館
担当者または講師	担当者・講師等の区分：外部講師 氏 名： 渡邊静男氏、他6名（津波被災農家の方々） 所属・役職等：(株) 仙台荒浜アグリパートナーズ代表取締役など
所要時間または「コマ数×単位時間」	13:30～15:30
プログラムのカテゴリ、形式※4	3 講演会・シンポジウム
活動目的※5	6 防災に関する知識を深める
達成目標	津波被災農家の方々から、地震と津波による辛く悲しい苦悩の日々の体験談を聴くと共に、そこから立ち直って農業再生・復興への道のりや心の変容を教えていただくことにより、どんな苦難にも立ち向かう勇気と力を知り、生き抜く力の糧を学び取る。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	1、講演依頼：昨年度から本講演会を開催しており、今年度も快諾 2、講演会の開催 (1) 講師：津波で被災した農家の方々・7名 (2) 講演内容：7人の講師がそれぞれの震災の体験談と、心の葛藤・変容や前向きに生き残るための希望や夢を赤裸々に講話 (3) 質疑：講演から生徒が抱いた思いや感動を講師に伝え、自らが感じ得た将来への決意や希望などを述べ、講師からコメント・励ましを享受 3、講演を聴き、7月・11月の津波被災農家に弟子入り体験を実施
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	本校生徒が昨年度に農作業の奉仕活動を行い、製品化された綿花商品を、被災農家の協力を得て展示
参加人数	1・2年生212人と保護者132人、教員15人の計359人
経費の総額・内訳概要	講師の皆さんは無償にてご支援・ご協力をいただいております。 ※ 本校では津波被災農家に、夏に畑の除草作業と秋に収穫作業を支援をしていることもあって無償にてご理解をいただいております。
成果と課題	【成果】津波被害を受けてない生徒たちは、同じ仙台市内でも被災状況の違いを知り、未だ復旧にいたらずに不自由な仮設住まいを強いられている現況を学ぶ。さらに、どんな苦難にも負けず、前に進もうとしている方々から、生き抜く力の糧を学び、逆に励ましと希望、勇気をいただいている。 【課題】震災前の生活にもどっている本校生徒たちが、農家の方々から学んだ教訓を継承するため、今後どのような教育活動を行うべきか、生徒だけでなく本校教職員が問われている。
成果物	生徒作文、報告書

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ③】※3

タイトル	津波被災農家に弟子入り体験学習	
実施月日（曜日）	7月26日(金)、11月17日(日)	
実施場所	仙台市若林区荒浜（仙台市の沿岸部）	
担当者または講師	担当者・講師等の区分：津波被災農家の皆さん 氏 名：渡邊静男氏、他十数名（津波被災農家の方々） 所属・役職等：(株) 仙台荒浜アグリパートナーズ代表取締役など	
所要時間または「コマ数×単位時間」	8：30～16：30	
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間 13 体験学習	
活動目的※5	10 その他（被災農家への奉仕支援活動）	
達成目標	<p>津波被災農家が塩害のために稲作をできない畑で綿花を栽培し、農業再生・復興に向けて尽力している姿から、何事にも諦めない力強い精神力を、生徒が支援活動を通して体験的に知り、自らの生き抜く力の糧として学び取る。</p> <p>生徒は綿花畑で真夏に除草作業と初冬に綿花収穫作業を行い、農業作業の大変さと苦勞を体感的に理解する。それと共に、助け合い支え合う心の育成と奉仕的精神を培う。</p> <p>この弟子入り体験は昨年から継続しており、生徒は自らの地域と比較して津波被災地の復旧・復興の様子とその進捗状況を確認している。生徒はいまだに元の生活に戻れない、戻る見込みもない方々の存在を知り、自分に何ができるのか、何をしなければならないのか、様々な考えや思いを抱き、そこから自らの発想により新たな取組が生まれることを願い、ねらいとする。</p>	
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>1、事前打ち合わせ：農家の方々と今年度の計画・内容等の検討</p> <p>2、津波被災農家の方々による講演：実践プログラム②に示したように、弟子入り体験の前に農家の方々から「地震・津波の体験と農業再生・復興への道のり」について講話をいただく。</p> <p>3、弟子入り体験「綿花畑の除草作業」：7月26日(金) 参加者：1・2年生 198人、保護者 10人、教員 14人、計 222人</p> <p>(1)津波被災地の視察 9：00～ 昨年は家の土台だけが残る津波被災地を視察し、今年は津波が校舎三階まで到達した小学校を見学している。農家の方が校舎四階や屋上に避難し、救助された当日の様子を話してくれた。</p>	
		
3階まで津波が襲来した小学校	至る所に津波の爪痕が残る校内	屋上で津波避難・救出の様子を視聴

(2) 綿花畑で除草作業 10:00～

昨年は30度を超える夏日に作業を行ったが、今年はそれ程の暑さではなかったものの、午後には大雨・雷雨警報が発令されたため、13時に作業の中止を決定した。



綿花栽培と農作業の説明を聞く



広大な綿花畑に生徒たちが散らばって除草作業



4、弟子入り体験「綿花の収穫作業」：11月17日(日)

参加者：1・2年生209人、保護者12人、教員14人、計243人

(1) 綿花畑で収穫作業 9:30～

昨年は寒さで作業も大変だったが、今年は晴天に恵まれて棉花の収穫も順調に行われた。しかし、今年は悪天候が続いたことから、棉花の生育が遅れ、棉花の白い綿が膨らまず、固い殻に包まれた棉花の実を収穫している。



昨年と異なる収穫方法の説明



固い殻の綿花の実を根こそぎ収穫



(2) 地域の仮設住民の方々と収穫祭に参加 12:30～

収穫が終わって、昼食を農家や仮設住民の皆さん約200人と食べながら交流を図った。また、1・2年生の約200人が仙台市復興ソング「仲間とともに」(作詞は仙台市の中学生、H25年7月制作)を皆さんの前で披露し、中には涙ぐむ農家の方々もおられた。



収穫を終えて団らん



農家等の皆さんに、約200人の生徒が合唱を披露



準備、使用したもの
・人材・道具、材料等

- 津波被災農家の方々が、被災地と津波被災の小学校などを案内・説明、除草作業と収穫作業を指導支援
- 生徒は軍手、タオル、弁当、水筒などを持参
- 農家や仮設住民の皆さんに、合唱を披露するのに使用する電子ピアノを準備



参加人数	7月除草作業：1・2年生 198人、保護者 10人、教員 14人、計 222人 11月収穫作業：1・2年生 209人、保護者 12人、教員 14人、計 243人 収穫祭：本校から 243人、農家や仮設住民等・約 200人
経費の総額・内訳概要	バス借り上げ代：1台 35,700円×6台×2日=428,400円
成果と課題	<p>成果と課題の抽出、分析、検証には、生徒を対象にアンケート調査を実施している。調査は「マスコミ報道について」「被災地を視察して」「奉仕活動について」「これからの自分」の4観点で構成し、観点ごとに5つの質問項目からなり、5件尺度法による質問紙で行う。以下に、7月と11月の農作業後の調査結果を比較し、分析する。</p> <p>(1) マスコミ報道について 項目「大変なことが起きていると感じる」で選択肢“大いに”を選択している割合(7月→11月)は、1年生が98.9→94.4%、2年生が89.7→89.7%と非常に高く、大震災のもたらす影響が継続していることが分かる。また、項目「テレビ等の報道で、これからの生活に心配や不安を感じる」で選択肢“大いに”を選択している割合についても、1年生が33.0→46.1%、2年生が43.7→39.1%であり、1年生が13%も高まっており、震災から時間が経ても時期によって心配や不安が生じている。選択肢“まあまあ”も加えると、1・2年生ともに7割を超えており、癒えない心情が継続している。</p> <p>(2) 被災地を視察して 項目「被災地の復旧・復興に自分の力を活かしたい」で選択肢“大いに”を選択している割合は、1年生が55.4→61.8%、2年生が69.0→71.3%であり、弟子入り体験を重ね、自分の力を活かしたい思いが増えている。選択肢“まあまあ”を含めると1・2年生ともに9割を超え、被災地のために役立ちたい思いを多くの生徒が抱えていることが分かる。また、項目「被災地のために、何ができるか考えたい」で選択肢“大いに”を選んでいる割合は、1年生が55.4→67.4%、2年生が63.2→71.3%であり、弟子入り体験を重ねることによって何ができるかを考える生徒が確実に増加している。</p> <p>(3) 奉仕活動について 項目「自分の力が役立ったと思う」で選択肢“大いに”を選んだ割合は、1年生が38.0→55.1%、2年生が43.7→55.2%と大きく増しており、7月に午後の活動が中止になったことも影響しているものの、思いを抱く割合が高まりを見せている。項目「どんな苦難にも立ち向かう勇気と力を感じた」では選択肢“大いに”を選んだ1年生は58.7→70.8%、2年生が63.2→80.5%と大きく高まり、活動による農家の心情の理解も深まっていることが分かる。</p> <p>(4) これからの自分 項目「自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたい」で選択肢“大いに”を選んだ割合は、1年生が79.3→80.9%、2年生が72.4→82.8%であり、2年生の1割程度が助け合い・支え合いの大切さを、活動を重ねより強く感じたことが分かる。また、項目「これからも、人のために役立ちたい」でも選択肢“大いに”では、1年生が72.8→80.9%、2年生が77.0→83.9%とより高まりを増しており、活動を通じて奉仕的精神が培われていることが分かる。その他の項目「自分にできることにチャレンジ」「人に夢や希望、勇気を与えたい」「苦難を乗り越える努力をしたい」でも選択肢“まあまあ”を含めると9割以上になり、弟子入り体験が生徒に素晴らしい影響と成長を促していることが確認できる。</p>
成果物	平成24年度と平成25年度の調査分析による比較検証報告

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ④】※3

タイトル	仙台復興のシンボルイベントでの清掃奉仕活動 － 本校・健全育成ボランティア組織「アルカス隊」の取組 －
実施月日（曜日）	仙台七夕：平成25年8月2日(金)、6日(火)、7日(水)、8日(木) 仙台光のページェント：平成25年12月3日(火)
実施場所	仙台市青葉区中心街（イベント会場とその周辺）
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 仙台市青葉区安全安心街づくり推進協議会 仙台市青葉区一番町四丁目商店街振興組合
所要時間または「コマ数×単位時間」	8月2日 → 13:30～15:30 8月6、7、8日→9:30～11:30、13:30～15:30 12月3日 → 13:30～15:30
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 イベント・行事 17 その他(復興支援のための清掃奉仕活動)
活動目的※5	10 その他(仙台復興シンベルイベントの支援)
達成目標	本推進協議会では、安全で安心して暮らせる住み良い地域社会の実現を目指す一環として、「仙台七夕まつり」と「仙台光のページェント」前に環境美化活動を行い、県内外から訪れる多くの観光客に対して、美しくきれいな街仙台、安全で安心な街仙台をPRしている。このねらいを受け、本校の「アルカス隊」では清掃奉仕活動を“仙台の復興は自分たちの手で”という思いのもと、観光客が仙台復興イベントを気持ち良く楽しんでいただくことを願い、活動している。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	8月2日と12月3日の両日には、生徒約60名がイベント開催会場とその周辺のゴミ拾い等の清掃活動を行っている。 仙台七夕の開催当日の8月6～8日の三日間には、商店街振興組合の協力・指導を受けて、延べ70名の生徒が祭会場で膨大なゴミの回収と清掃を行っている。  光のページェント  仙台七夕
準備、使用したもの	清掃活動に必要な軍手など
参加人数	推進協議会の活動では約60名の生徒、商店街振興組合には、三日間で延べ70名の生徒が参加
経費の総額・内訳概要	バス代（8月6～8日は生徒の自己負担）
成果と課題	生徒たちは、仙台の復興は自分たちの手でという思いを抱き、被災地仙台で行われる2つの復興シンボルイベントに、震災前の観光客数が復活することを願い、さらには観光客に綺麗な街仙台のイメージを抱いてもらい、祭を楽しんでいただくことを望んで活動している。生徒たちはその思いや願いを、活動によってゴミがない綺麗な街にすることで目標を達成し、昨年から続けているこの活動も今年の参加生徒が増加しており、成果が得られているものと考えられる。
成果物	本校「アルカス隊」は本活動により、青葉区推進協議会と青葉区長から感謝状を授与

【実践プログラム番号： ⑤】※3

タイトル	校内・炊き出し調理コンテスト
実施月日（曜日）	平成25年10月4日(金) [昨年は平成24年11月28日(水)]
実施場所	本校・調理室、理科室
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 本校の1学年教員とPTA役員
所要時間または「コマ数×単位時間」	5・6校時 13:40～16:50
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間 17 その他（炊き出し調理のスキル向上）
活動目的※5	9 災害対応能力の育成
達成目標	炊き出しは、被災者にとって生命に関わる食事であり、その反面、避難所生活が長期化する場合には炊き出しを食べて栄養を補給するだけでなく、美味しい食を味わって食べる喜びを提供し、生き抜く力の糧や意欲をも与えることが出来る重要な食事である。このため、被災状況下を想定して調理の条件を設定し、食べて栄養を取るだけでなく、短時間で調理しながらも美味しく、安く、早く、手軽に炊き出しをできる技能を身に付ける。さらに、有事の際に活かせるレシピを追究・提供できるようにコンテスト形式で競い合い、よりよい炊き出し調理の知と技を習得する。
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	1、実施の流れ ① 校内炊き出し調理コンテストの目的と実施内容・方法を説明 ② 生活班ごとに炊き出しレシピと調理方法等の企画を協議・検討して決定 ③ レシピの提出、コンテストの前日・放課後に食材を購入 ④ 炊き出し調理コンテストの実施 ⑤ PTA役員による炊き出し料理の審査と結果発表と講評 ⑥ 炊き出しレシピ集を編集し、冊子にまとめる 2、炊き出し調理の条件設定 震災下での炊き出し調理を想定し、次のような条件で炊き出し調理を実施する。 A、使える調理器具(調理室にあるもの；鍋、包丁、まな板など) B、盛り付け食器： 使い捨てのドンブリ・皿(一人ワンセット) C、食材と調理条件 ○ご 飯・・・無洗米を災害救助用・炊飯袋に入れ、水を入れた鍋に袋を入れて、火力を調節してご飯を炊く(炊き込みご飯も可)。 ○おかず・・・カット野菜や冷凍食品を除き、野菜等の食材をカットするなど必ず調理の手を加え、煮る、焼く、炒める調理でおかずをつくる。 ○食 数・・・食数は班員+1名分を作り、+1名分は審査用とする。 D、調味料：調味料は家から持参を基本とする。例えば、弁当に付いてくるビニールに入った醤油、ケチャップ、ソースなども使える。昨年コンテストでは、炊飯袋に舞茸とだし汁等を入れて炊き込みご飯にしたケースもある。

E、食材の購入：コンテストの前日・放課後に買い物に行き、学校から支給される一人 200 円の予算で班毎に食材を購入し、調理室の冷蔵庫等で保管する。

F、水道やガスの使用：これらは使用制限をしない。

G、調理時間：調理は 60 分以内とし、盛り付けも含める。残りの 20 分の時間で、班員で試食する。

3、審査について

(1) 審査基準：①栄養価、②美味しさ・味、③食欲をそそる盛り付けと見た目の良さ、④実用性(誰でも簡単に調理)、⑤60分の制限時間厳守(5分ごとに5点の減点)を、各20点として100点満点で審査する。

(2) 審査員と審査・講評：5人のPTA役員に審査員を依頼し、調理準備室にて審査を行う。審査員には、全ての班に講評を記入していただく。

4、平成25年度のコンテスト

(1) 実施学年・組 …1年1組～3組が同時に実施

(2) コンテスト会場…1組：調理室、2組：第1理科室、3組：第2理科室、審査室：被服室

(3) 平成25年度の結果

審査結果は、2組5班が73点を獲得して最優秀賞、次いで1組6班が71点で優秀賞、優良賞については1組1班と2組6班が同点の70点を獲得し、4つの班を表彰とした。審査員による審査講評は、次の通りである。

賞	班	審査員の講評
最優秀賞	2組5班	○ご飯と一緒にニラをゆでており、手際がよかった。 ○ごはんがおいしかった。 ○色取り、味付けがよかった。
優秀賞	1組6班	○マヨネーズはなくてもよい。 ○ご飯がおいしかった。 ○天かすなどの工夫がよかった。
優良賞	1組1班	○色取りにプチトマトがあればよかった。 ○豆ごはんのアイデア Good。
	2組6班	○色取りがよかった。 ○じゃこご飯のアイデアがよかった。 ○ご飯が固い。

最優秀賞(2組5班)



われらのご飯！ 究極のDON

優秀賞(1組6班)



eAT たぬき Rice !?

(1組1班) 優良賞 (2組6班)



Very happy ほかほかごはん



～秋にピッタリ！ 簡単炒め物～



5、レシピ集の作成と活用

全ての班のレシピを冊子として作成し、校内に展示して生徒に炊き出しの興味・関心を持たせ、防災意識や防災対応能力とその知識・スキルの向上を図る。また、今年度以降の中学生在が主導する地域防災訓練でもレシピを展示し、保護者等に試食をしてもらうなど、学校や家庭そして地域の関わりを強める取組の一つとして実施する。

平成24・25年度のレシピ集は、第1学年で実施した校内・炊き出し調理コンテストにより、以下のレシピ集としてまとめている。なお、生徒が考えた炊き出し調理レシピは、予め料理を提供する季節を想定し、次の区分に分けている。

【提供する季節の想定区分】

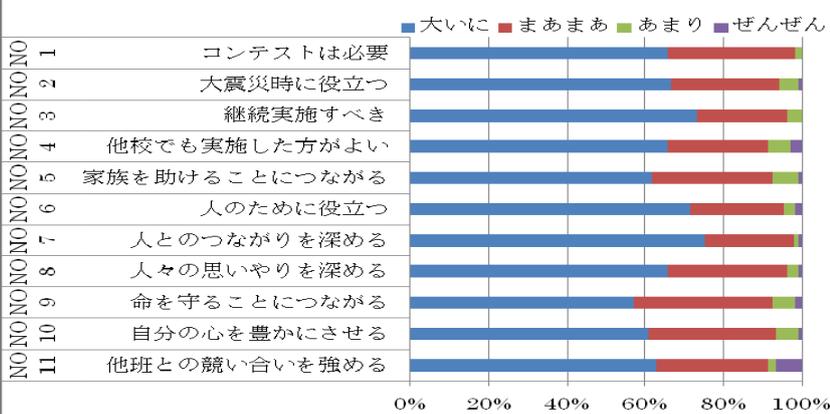
A、暑い夏 B、寒い冬 C、暑くもなく寒くもない春や秋
D、その他の季節・気候の時 [記入欄]

(1)平成24年度のレシピ集

組	班	炊き出し調理レシピ名	想定区分
1組	1	春の香りただよう絶品炊き出し和風仕立て	C
	2	色とりどりの六色丼、冷や奴	C
	3	ジバングのごくうま餃子グンパーハ	C
	4	Egg is my friend	B
	5	秋の食事	C
	6	6班のTAKIDASHI	C
2組	1	ほかほか温ったか簡単煮物	C
	2	体&心が温まる肉なし肉じゃが	B
	3	ボリューム大 あしもの気まぐれ生が焼き	D
	4	心温まるなつかしのお袋の味	C
	5	簡単! おいしい! あったかレシピ	C
	6	復興へ! ほくほく飯	C
3組	1	寒さに負けるな! ほかほかまいたけご飯	B
	2	ほくほくの黄金ケーキ	C
	3	仙台風 ☆ Like in	B
	4	食べてシャキシャキ!! 星空サラダ☆	C
	5	被災地復興 和風メシ	B
	6	心も体も温まる winter マジック !!	B

(2)平成25年度のレシピ集

組	班	炊き出し調理レシピ名	想定区分
1組	1	Very appy ほかほかごはん	D
	2	とつげき!! となり の たきだしごはん	C
	3	Oいしくて Suてきな Saーもん D0ん☆	C
	4	あったかゴロゴロ スープ と 炊き込みごはん	C
	5	かんたん☆ 1組5班の低価格レシピ	C
	6	eAT たぬき Rice !?	C
2組	1	日本 THE 和食 !!	C
	2	冬に食べたい! あったかジュシーあぶらふ井	B
	3	秋のぽかぽか・ごはん	C
	4	心まで温まる 具たくさん料理	B
	5	われらのご飯! 究極のDON	C
	6	～秋にピッタリ! 簡単炒め物～	C
3組	1	栄養たっぷり きらきらご飯	C
	2	2班の特製 秋冬ご飯	C
	3	スタミナ☆ご飯	C
	4	ほかほか! 豚丼と野菜炒め	D
	5	心が温まる 激うまランチ!	C
	6	こりゃ絶品! とろとろ親子丼と秋の味噌汁	C

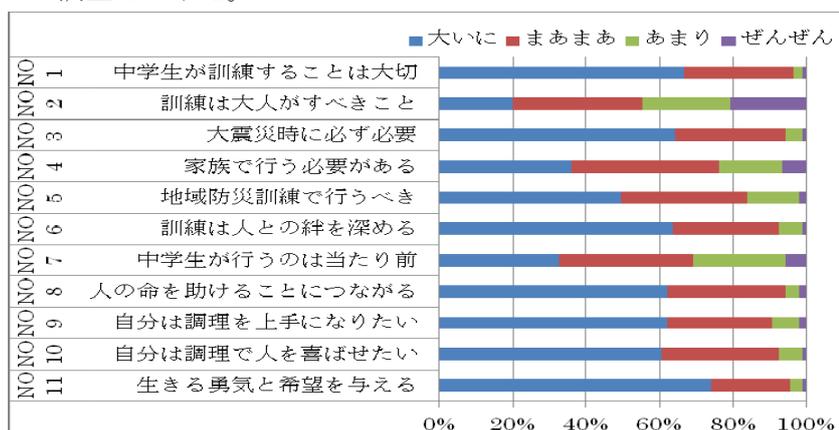
<p>災害救助用炊飯袋でご飯作り</p>	<p>平成25年度 炊き出し調理コンテストの様子</p>  <p>【PTA役員による審査の様子】 【H25 調理後の食事の様子】</p>																																																												
	<p>調理器具：調理実習室にある鍋、フライパン、包丁、まな板、 消耗品：災害救助用炊飯袋、使い捨て器、割り箸、無洗米など 協力者：審査委員として本校PTA役員5名</p>																																																												
<p>準備、使用したもの ・人材・道具、材料等</p>																																																													
<p>参加人数</p>	<p>1年生206名、PTA役員5名</p>																																																												
<p>経費の総額・内訳概要</p>	<p>[206人+18班(3組×6班)] ×200円=44,800円</p>																																																												
<p>成果と課題</p>	<p>平成25年度・アンケート調査について 平成25年度にコンテストの後、1年生・全員を対象としてアンケート調査を実施し、その結果について以下に示す。 (1)「炊き出し調理コンテスト」について このアンケート調査では、コンテストについて生徒の思いや考えなどを抽出する。集計結果は、グラフの通りであり、その分析について記述する。 選択肢「大いに」と「まあまあ」をあわせると、全ての項目で9割を超えている。特に、NO1“コンテストは必要”とNO7“人とのつながりを深める”においては、98%に達している。</p>  <table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>大いに</th> <th>まあまあ</th> <th>あまり</th> <th>ぜんぜん</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>NO1 コンテストは必要</td> <td>98%</td> <td>2%</td> <td>0%</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>NO2 大震災時に役立つ</td> <td>65%</td> <td>30%</td> <td>5%</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>NO3 継続実施すべき</td> <td>75%</td> <td>20%</td> <td>5%</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>NO4 他校でも実施した方がよい</td> <td>60%</td> <td>35%</td> <td>5%</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>NO5 家族を助けることにつながる</td> <td>60%</td> <td>35%</td> <td>5%</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>NO6 人のために役立つ</td> <td>70%</td> <td>25%</td> <td>5%</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>NO7 人とのつながりを深める</td> <td>98%</td> <td>2%</td> <td>0%</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>NO8 人々の思いやりを深める</td> <td>65%</td> <td>30%</td> <td>5%</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>NO9 命を守ることにつながる</td> <td>60%</td> <td>35%</td> <td>5%</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>NO10 自分の心を豊かにさせる</td> <td>60%</td> <td>35%</td> <td>5%</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>NO11 他班との競い合いを強める</td> <td>60%</td> <td>35%</td> <td>5%</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	項目	大いに	まあまあ	あまり	ぜんぜん	NO1 コンテストは必要	98%	2%	0%	0%	NO2 大震災時に役立つ	65%	30%	5%	0%	NO3 継続実施すべき	75%	20%	5%	0%	NO4 他校でも実施した方がよい	60%	35%	5%	0%	NO5 家族を助けることにつながる	60%	35%	5%	0%	NO6 人のために役立つ	70%	25%	5%	0%	NO7 人とのつながりを深める	98%	2%	0%	0%	NO8 人々の思いやりを深める	65%	30%	5%	0%	NO9 命を守ることにつながる	60%	35%	5%	0%	NO10 自分の心を豊かにさせる	60%	35%	5%	0%	NO11 他班との競い合いを強める	60%	35%	5%	0%
項目	大いに	まあまあ	あまり	ぜんぜん																																																									
NO1 コンテストは必要	98%	2%	0%	0%																																																									
NO2 大震災時に役立つ	65%	30%	5%	0%																																																									
NO3 継続実施すべき	75%	20%	5%	0%																																																									
NO4 他校でも実施した方がよい	60%	35%	5%	0%																																																									
NO5 家族を助けることにつながる	60%	35%	5%	0%																																																									
NO6 人のために役立つ	70%	25%	5%	0%																																																									
NO7 人とのつながりを深める	98%	2%	0%	0%																																																									
NO8 人々の思いやりを深める	65%	30%	5%	0%																																																									
NO9 命を守ることにつながる	60%	35%	5%	0%																																																									
NO10 自分の心を豊かにさせる	60%	35%	5%	0%																																																									
NO11 他班との競い合いを強める	60%	35%	5%	0%																																																									



また、選択肢「大いに」だけを見ても、NO3 “継続実施すべき”で73.3%、NO6 “人のために役立つ”で71.4%、NO7 “人とのつながりを深める”で75.2%を示している。これらのことから、生徒はコンテストが必要であり、継続すべきものと捉え、さらにはコンテストが人のために役立ち、人とのつながりを深める取組として大いに評価していることが分かる。

(2) 「炊き出し訓練」について

次に、炊き出し訓練について、生徒がどの様に捉えているかを調査してみた。



まず、選択肢「大いに」では、6割を超えた項目がNO1 “中学生が訓練することは大切”、NO3 “大震災時に必ず必要”、NO6 “訓練は人との絆を深める”、NO8 “人の命を助けることにつながる”、NO9 “自分は調理を上手になりたい”、NO10 “自分は調理で人を喜ばせたい”、NO11 “生きる勇気と希望を与える”であり、特にNO11は「大いに」と回答した生徒が74%をしめた。一方、誰が炊き出し訓練を行うかについては、NO2 “大人がすべき”で「大いに」20.0%・「まあまあ」35.2%・「ぜんぜん」21.0%、NO8 “中学生が行うのは当たり前”で「大いに」32.7%・「まあまあ」36.5%・「ぜんぜん」5.8%になっている。訓練を大人に任せることについては、ほぼ二分している。しかし、“中学生が訓練することを当たり前”と考えている生徒は、「大いに」と「まあまあ」から69.2%であり、多くの生徒が大人任せの訓練だけでなく、中学生が当たり前に行う訓練として認識していることが分かる。

地域や家族で炊き出し訓練を行うことについては、選択肢「大いに」と「まあまあ」をあわせると、地域では83.5%、家族でも76.2%となっており、多くの生徒が地域だけでなく、家族でも炊き出し訓練を必要であると考えている。

成果物

炊き出し調理コンテスト・レシピ集【平成24&25年度版】

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。



【実践プログラム番号： ⑥】※3

タイトル	2年生による防災教育学習成果の外部発信・評価
実施月日（曜日）	①10月18日 ユネスコ・スクール東北大会 ②10月25日 第39回全日本教育工学研究協議会全国大会
実施場所	①宮城教育大学 ②仙台市科学館
担当者または講師	担当者： 宮城教育大学、日本教育工学協会
所要時間または「コマ数×単位時間」	① 11:00～11:40 ② 10:00～10:50
プログラムのカテゴリ、形式※4	3 講演会・シンポジウム
活動目的※5	6 防災に関する知識を深める
達成目標	防災教育の実践において、生徒が体験的な活動を通じて思考、判断、表現する学習過程で得られる結果をまとめ、外部発信することでプレゼン能力を培うとともに、多様な関係者から外部評価を求める。この評価により、生徒の学習成果が多面的で専門的視点から助言指導を得て、生徒はより防災教育に関する学習の深化、発展に挑むことができる。さらに、この外部評価は教員の指導方法等の工夫・改善に活かすことで、本校の防災教育の拡充と発展に資する。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<ol style="list-style-type: none"> 発表者の選出 <ul style="list-style-type: none"> ○2年生・全員に防災教育の学習成果等についてレポートを作成させ、学年教員が発表者を選出 ○選出された2年生36人を、レポートの内容に応じて一班6名の6班に編制 班毎にプレゼンの作成と発表分担を決定 各班が防災教育実践から学んだことや調べたことなどについて、発表原稿とプレゼンソフトを作成 2つの大会でのプレゼン実施 ユネスコ・スクール東北大会では2つの班が代表し、教育工学全国大会では6つの班がプレゼンを実施 <p>※各班の発表タイトルは次の通り</p> <ul style="list-style-type: none"> 【1班】2学年の取り組み～私たちの復興支援チャレンジ～ 【2班】日本と津波の付き合い方 明るい未来への第一歩 ～ the first step for our bright future ～ 【3班】FOR OUR FUTURE ～1億3千万人が安心できる国づくり～ 【4班】震災復興へのみち“私たちは今 何をすべきだろうか” 【5班】綿花 ～コットンが私たちに教えてくれたこと～ 【6班】食 ～生命をつなぐために～
準備、使用したもの	プレゼンに使う機器（CP、プロジェクター、スクリーン）
参加人数	大会参加者 ①東北大会・約100人、②全国大会・約2,000人
経費の総額・内訳概要	大会会場までの貸切バス代：大会から支給
成果と課題	生徒は防災教育実践において体験的な活動から学んだ成果をまとめ、得られた課題を追究して創意工夫してプレゼンを行っており、その能力が培われている。しかし、達成目標については参観者からの助言指導があまりなかった。そこで、今後、外部発信の機会を設け、生徒が学習の深化、発展がなされるよう配慮していく。
成果物	生徒が作成したプレゼンソフト（創意あふれる防災教育の成果物）



【実践プログラム番号： ⑦ 】※3

タイトル	3年生による防災教育ポスターセッション
実施月日（曜日）	平成25年11月15日（生徒が主導する地域防災訓練・当日）
実施場所	本校の体育館、武道館、視聴覚室、1階・4教室（計10ヶ所）
担当者または講師	担当者：3年生・全員
所要時間または「コマ数×単位時間」	ポスターセッション [11月15日] 10:30～11:30 （準備期間：10月9日～11月14日 総合的な学習の時間）
プログラムのカテゴリ、形式※4	2、講習会・学習会・ワークショップ 4、総合的な学習の時間 8、その他学校内での時間
活動目的※5	6、防災に関する知識を深める
達成目標	生徒は、防災・減災に関わる10のテーマについて、様々な教材やネット等から情報収集し、必要な情報を探り出しながら、情報を抽出・整理してテーマの課題解決に迫る。この学習過程から生徒の思考力、判断力、表現力を育むとともに、防災・減災に関わる関心や意欲を高め、そして知識を習得することをねらいとする。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>1、本校・防災主任が生徒会役員に概要説明と指示；9月25日</p> <ul style="list-style-type: none"> ○テーマ学習とその成果発表のポスターセッションについて説明 ○3年生の各テーマ担当を生徒会が割り振り、各テーマを担当する班員とポスターセッションで発表する担当者を決定 ○平成25年度のテーマは、次の10のテーマを選定 <ul style="list-style-type: none"> ①仙台市が本校に備える備蓄食と食数 [実際に備蓄食を展示して発表] ②仙台市が本校に備える非常災害時の備品 [防災無線、発電機、仮設トイレなど展示して説明] ③生徒主導の地域防災訓練で行う炊き出し調理 [災害救助用炊飯袋を使用するなど、災害時を想定] ④集団避難経路の決定方法と本校までの避難ルート [一時避難場所からの集団避難と個別避難を想定] ⑤非常持出袋の備えと市販品等の内容物の比較 [市販品等の内容物比較から考察・提言] ⑥アルカス隊(実践プログラム番号④に記載)による震災復興の奉仕活動 [津波被災農家の支援、仙台復興の支援活動など] ⑦AEDの使用方法和演習 [AEDの説明と使用方法を演習] ⑧本校が行っている防災教育の実践活動を報告 [実践活動の実績や成果・効果等の報告] ⑨災害弱者(要援護者)への支援活動の内容と方法 [高齢者や障害者などの災害弱者の支援活動] ⑩生徒が考える避難所グッズと避難所備品等の模擬体験 [生徒が考え作成する避難所グッズ等の紹介] <p>2、生徒会が3年生にテーマ学習とポスターセッションを説明し、テーマ毎の班員と発表担当者を発表；10月9日</p>





3、全3年生がテーマ班毎に情報収集や調査活動を実施：10月9日～



4、テーマ毎に模造紙に学習成果をまとめ、原稿作成と発表練習



5、ポスターセッション；地域防災訓練・当日の10:30～11:30
 本校1・2年生と地域防災訓練に参加している地域住民の皆さんに、テーマ毎の学習成果を発表〔10会場で発表〕



ポスターセッションは10テーマが同時刻に同時に行われ、発表7分、質疑3分の計10分、そして参観者が次のテーマ会場に移動する5分の15分をサイクルに、10:30、10:45、11:00、11:15、11:30に開始される。参観者は興味あるテーマ5つ視聴できることになる。

テーマ毎に生徒たちは発表方法を工夫し、演劇仕立てで行ったり、ツナ缶ランプの実演をしたりするなど、参観者が聞き入り、歓声をおこすほど、熱心に聞き入っていた。

準備、使用したもの
 ・人材・道具、材料等

生徒が作成するポスターセッションに用いる模造紙、本校の避難所用・備蓄物（備品、消耗品）、その他・発表に必要な物品等

参加人数

視聴者：本校1・2年生 212人、地域等の訓練参加者209人

経費の総額・内訳概要

模造紙2,000円程度

成果と課題

本プログラムの実践では、ポスターセッションを行った3年生や視聴した1・2年生と地域住民等を対象に、アンケート調査を行った。

調査内容	対象	大いに	まあまあ	あまり	ぜんぜん
テーマ毎の発表では、学ぶことや知ることができた	3年生	66.7	29.3	4.0	0
	参加者	53.7	38.8	6.0	1.5
	1年生	82.4	16.7	1.0	0
	2年生	72.0	24.7	2.2	1.1



	<p>選択肢“大いに”と“まあまあ”をあわせた割合は、4者ともに9割を超えており、ポスターセッションの成果が良好であったことが分かる。特に1年生は“大いに”が82%、2年生が72%であり、3年生の発表から学び、知ることが多かったことが分かる。</p> <p>また、地域住民等の参加者は、選択肢“大いに”53%、“まあまあ”38%であり、大人の方々であっても、中学生から大いに学んでいる結果となっている。</p> <p>次に、アンケート調査のコメントを、対象ごとに抜粋して示す。</p> <p>【3年生】</p> <p>○ポスターセッションは劇も入れて行い、楽しくやれた。質疑の時、発表が素晴らしいと言ってくれる地域の方もいたので、とても達成感があふれました。</p> <p>○ポスターセッションをして具体的な内容について知ったり、まとめたりできたのも良かったと思います。</p> <p>○ポスターセッションでは、地域の方々がためになるアドバイスや感想をおっしゃってくれたため、回を重ねる毎に上手になっていくのを感じることができました。なかなか地域の人々と触れ合う機会がなかったため、このような訓練はこれからも必要になってくると思います。地域の方々が知識を多く持っているの、それをこれからも受け継いでいきたいです。</p> <p>○私は今回、ポスターセッションをするために色々なことを調べて、今まで知らなかった役に立つ情報を知ることができた。</p> <p>○ポスターセッションで地域の方から、様々な意見や体験を聞くことができたので、ポスターセッションは必要なことだと思った。</p> <p>【地域住民】</p> <p>○中学生は色々調べて良く学習しているなあと感じました。とてもためになることもあったので、それぞれの発表が多くの人に伝わるよう、冊子・お便りなどで配布されるといいですね、</p> <p>○学校にこんな備蓄品や施設があることを初めて知りました。大震災時に知っていれば、避難に来たかもしれません。今後に備えて学校の存在が心強く感じました。</p> <p>○中学生の発表は、よく調べてあって、とても参考になりました。</p> <p>○三年生の発表がしっかりしてて、素晴らしかった。</p> <p>■各班にハンドマイクが必要。高齢者が多いので、ゆっくり、はっきりと分かるように説明することが大事。</p> <p>【1・2年生】</p> <p>○ポスターセッションが分かりやすく勉強になった。</p> <p>○今回の地域防災訓練で、三年生が調べたポスターセッションはすごいと思った。</p> <p>○先輩達のポスターセッションはとても興味深い内容で、ためになりました。</p> <p>○3年生のポスターセッションでは、学ぶことが沢山ありました。身近なもので防災グッズを作ったり、学校の中の非常用グッズの種類・量や入っている場所を初めて知りました。これは今後の生活に活かせることだと思います。</p> <p>○3年生の先輩方のポスターセッションでは、地震が来た際の備えやAEDの使い方など、災害時に役立つようなことが沢山学べた。</p> <p>以上のように、アンケートのコメントからは3年生がポスターセッションを行ったことで、大いなる成果を得られたことが分かる。しかし、高齢者に対する配慮が欠けており、声の大きさや見やすい文字の大きさなど、今後の課題と改善点も明らかになった。</p>
成果物	ポスターセッションで創意工夫して作成した発表用模造紙

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)



【実践プログラム番号： ⑧】※3

M：みなみ、Y：よしなり

タイトル	⑧なみ⑧しなり マイ 南吉成小中学校・連携「MY復興プロジェクト」
実施月日（曜日）	11月11日（月）
実施場所	中学校・体育館
担当者または講師	担当者：児童会・計画委員、生徒会・執行部
所要時間または「コマ数×単位時間」	5・6校時 13:30～14:30
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 イベント・行事 4 総合的な学習の時間
活動目的※5	8 防災意識を高める
達成目標	南吉成小学校と中学校の児童生徒が一同に会し、仙台市製作の復興啓発DVDの視聴と、小・中学校復興ソングの合唱を披露しあうことで、震災復興や防災への意識を高め、震災教訓を受け継ぐことをねらいに合同でイベントを実施する。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	MY復興プロジェクトの開催は、児童会計画委員と生徒会執行部が協力して運営・進行を行った。 1、開会あいさつ・・・小学校代表、中学校代表 2、仙台市製作DVDの視聴 3、小学校復興ソングの合唱披露・・・小学校4年生・約100名 4、中学校復興ソングの合唱披露・・・中学校1年生・約100名 5、復興アピール宣言・・・小学校代表、中学校代表 6、閉会あいさつ・・・中学校・生徒会長
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	DVD視聴：パソコン、プロジェクター、スクリーン 掲示・展示物：児童・生徒等が折った千羽鶴
参加人数	小学生約600人、中学生約300人、小中学校の教職員50人
経費の総額・内訳概要	千羽鶴の折り紙 約18,200円
成果と課題	小中学校の児童生徒と教職員が一同に会してイベントを開催することで、MY復興プロジェクトによる小・中学校の連携の推進と強化を図っている。さらに、震災の教訓を受け継ぎ、有事や自然災害等の際に互い支え合い、助け合うために、協力・支援ができる児童会と生徒会の意識を高めている。又、連携推進のための体制と組織の構築に向けて、その実現のための切っ掛け作りを促すことができた。 今後、児童会と生徒会がこの構築に向けて、企画・計画を立案し、実行・実現に向けて検討、審議を重ね、障害や課題を明らかにしていく必要がある。また、児童会と生徒会が主体的に活動できるように、教員の指導・支援の工夫が求められる。
成果物	小中学生が創る・仙台復興を願う千羽鶴





【実践プログラム番号： ⑨】※3

タイトル	中学生が主導する地域防災訓練と防災シンポジウム												
実施月日（曜日）	11月15日（金）												
実施場所	本校の校舎、体育館、武道館												
担当者または講師	担当者：中学生、学校支援組織、大学、市教委など 講師：中溝 茂雄 氏（神戸市立住吉中学校 校長）												
所要時間または「コマ数×単位時間」	8：15～17：00												
プログラムのカテゴリ、形式※4	2 講習会・学習会・ワークショップ 3 講演会・シンポジウム 16 避難・防災訓練												
活動目的※5	3 災害に強い地域をつくる												
達成目標	<p>少子高齢化と核家族化が進み、生徒を含む住民間の絆が懸念される地域において、次のねらいに基づいて「中学生が主導する地域防災訓練」などの防災教育を推進し、地域防災力を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 防災意識を高め、災害時の自助・共助の在り方を習得 ○ 地域における災害対策や対応機能の向上 ○ 防災・減災の生活行動習慣の獲得 ○ 災害時の的確かつ臨機応変な判断能力の育成 <p>本教育実践では、中学生が核となる防災教育活動に取り組み、地域住民を巻き込む活動に発展させることで、学校・生徒と地域住民間の協働体制に進化させ、継続的に実践を展開する。</p> <p>このことにより、学校・生徒や保護者を含む地域住民の「関わり」と「つながり」が拡充・継続し、持続可能な地域社会づくりと地域の活性化を推進する。</p>												
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>1、中学生が主導する地域防災訓練の概要</p> <p>本校3年生が、①避難所の開設と運営、②炊き出し調理と配給、③集団避難の誘導、④救急・救護、⑤災害状況の情報収集・報道、⑥災害対策本部の各班に分かれ、学校支援組織の支援を受けて地域防災訓練を担い、実施する。その際、中学1・2年生は、主に避難者役となり、3年生の指導を受けて訓練に参加して学ぶことにする。</p> <p>生徒会役員は、本訓練の企画、計画を立案し、3年生に対して訓練の概要説明や①～⑤の各班に所属する3年生の選出、そして訓練当日には⑥の対策本部に属して、訓練すべての運営・進行を司る。</p> <p>教職員は、3年生が企画、計画、準備、実施する各過程において助言に徹し、指示や指導をひかえ、生徒自らが考え、判断し、行動・表現ができるよう促す役割を果たす。</p> <p>（1）学校支援組織との協働・連携</p> <p>中学生主導の地域防災訓練では、本校の既存組織である“南吉成中学校区・青少年健全育成協議会”を拡大させて発足する「南吉成・学校支援組織 MY・SP隊」に、本訓練でそれぞれの地域組織が各班を分担して助言と活動支援を行っていただく。以下の表にその分担を示す。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>生徒の班活動</th> <th>学校支援組織の担当</th> <th>その他、協力機関等</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>避難所設営・運営班</td> <td>健全育成委員、体育振興会、老人会・クラブ</td> <td>○南吉成地区社会福祉協議会</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>炊き出し調理班</td> <td>父母教師会・役員、婦人会</td> <td>○防犯協会、○交通安全協会、○消防団、</td> </tr> </tbody> </table>		生徒の班活動	学校支援組織の担当	その他、協力機関等	1	避難所設営・運営班	健全育成委員、体育振興会、老人会・クラブ	○南吉成地区社会福祉協議会	2	炊き出し調理班	父母教師会・役員、婦人会	○防犯協会、○交通安全協会、○消防団、
	生徒の班活動	学校支援組織の担当	その他、協力機関等										
1	避難所設営・運営班	健全育成委員、体育振興会、老人会・クラブ	○南吉成地区社会福祉協議会										
2	炊き出し調理班	父母教師会・役員、婦人会	○防犯協会、○交通安全協会、○消防団、										

3	集団避難・誘導班	消防団、交通指導隊、交番所、地区委員	○仙台市教委 ○宮城教育大学 ○仙台北警察署 ○南吉成交番所 ○吉成コミュニティーセンター、など
4	救急・救護班	民生児童委員会、婦人防火クラブ	
5	災害状況・情報収集班	健全育成委員	
6	災害対策本部	町内会長(7町内会)	

生徒の班ごとの訓練活動については、訓練実施前に生徒と組織が集まり、班毎に生徒が活動内容と実施計画等について説明を行い、各組織の大人の方々と質疑して訓練実施に備える。

(2) 訓練・講演会の日程

生徒会・役員は、午前中に災害対策本部に属し、訓練すべての連絡調整を行い、ポスターセッションの進行と運営、午後にシンポジウムの司会・進行などを担う。

時刻	訓練概要	3年生・生徒会の活動	1・2年生と地域・参加者の動向
8:15		○3年生・登校、係ごと準備	
8:30	地震発生	〈班毎に活動〉	○各地区の一時避難所・集合
9:00	集団避難・移動開始	(避難所・受付、運営)	○一時避難所から集団避難・移動
↓	〈避難所・受付〉		〈受付〉 【学校近隣の生徒は学校に登校】
10:00	学校に避難・受付完了	○生徒会が説明	○学校到着・受付完了
	本日の日程・活動説明	○3年生等が	○日程説明で、本日の活動の確認
10:30	ポスターセッション	ポスターセッション	○ポスターセッションを聞き、
↓	↓〈15分間隔で班・移動〉	〈班毎の活動終了〉	ワークシートに記入
11:30	(終了)		《4つのテーマを視聴》
11:45	炊き出し試食	○炊き出しの配給(調理班)	○炊き出しの試食
12:45	(後片付け)	(後片付け)	(後片付け)
13:00	開会	①開会宣言 生徒会副会長	
	講演	②挨拶・講師紹介 校長	
(14:45~)	活動報告・総括等	③講演：『神戸復興のあゆみ、そして防災・減災への備え』 講師：神戸市立住吉中学校校長 中溝 茂雄 氏	
		④活動報告：各班が活動成果や課題等を発表	
		⑤訓練の総括講評：仙台市教育委員会、宮城教育大学	
		⑥御礼と閉会挨拶 生徒会長	
16:30	閉会・終了	⑦閉会宣言 生徒会副会長	

(3) ポスターセッションについて【概要については“実践プログラム番号⑦”、本報告書のP17参照】

3年生が以下の表に示す10のテーマを分担し、防災・減災に関すること・もの・考え等について模造紙にまとめ、テーマ毎に10の会場に分かれて集まる方々の前で説明・報告し、質疑を交わす。視聴者は、説明・報告7分、質疑3分程度、移動5分の計15分を一つのテーマにかけ、10:30、10:45、11:00、11:15の開始時刻として4つのテーマを参加する。1・2年生等は、視聴結果をワークシートに記録・感想・評価を行う。

位置	ポスターセッション・テーマ	
体育館	①	仙台市が本校に備える備蓄食と食数
	②	本校の炊き出し調理の概要
	③	避難経路の決定方法と本校までの避難ルート
武道館	④	仙台市が本校に備える非常災害時の備品
	⑤	本校が設置する避難所の模擬体験
視聴覚室	⑥	非常持出袋の備えと市販品等の内容物の比較
1年教室	1組	⑦アルカス隊による震災復興の奉仕活動報告
	2組	⑧AEDの使用方法と本校生徒AED研修会の報告
	3組	⑨本校の防災教育実践の情報発信(生徒会・役員)
	学習室	⑩災害弱者(要援護者)への支援活動の内容と方法

(4) 集団避難訓練について

一時避難所は、今年の訓練では一時避難所を4ヶ所にし、各40～60人程度の生徒と地域住民十数名が避難集合している。ただし、学校近隣の生徒については、直接に学校に避難・登校する。

3年生の集団避難・誘導の担当生徒は、1・2年生と地域住民を以下の表に示す一時避難所から、中学校まで集団避難誘導を務める。

	登校形態	地区	一時避難所
1	学校へ登校	以下の地区以外 (吉成2・3、南吉成3～6丁目等)	
2	一時避難所に集合の後、登校	南吉成1・2・7丁目	南吉成2丁目公園
3		中山吉成1・2・3丁目	中山吉成集会所
4		中山台2丁目、中山台西、芋沢	中山台2丁目公園
5		中山台1・3・4	中山台1丁目公園

(5) 各班の活動の様子

①避難所設営・運営班・・・避難所を設営して避難者に対応。受付で避難者の名前等を記録



②炊き出し調理班・・・非常災害用炊飯袋でご飯を炊き、本校特製カレー丼550食分を調理・提供
PTA役員が温かい豚汁を調理・提供



③集団避難・誘導班・・・4ヶ所に設けた一時避難所に集合し、生徒が誘導して本校まで集団避難



④救急・救護班・・・担当生徒が避難者に聞き取りによる健康調査や血圧測定など実施



⑤災害状況・情報収集班・・・生徒が支援組織の方と一緒に地域を巡回して危険箇所等を調べ、さらには各戸を訪れ、本校で午後開催するシンポジウムのチラシを配布
(写真は次のページ)



⑥災害対策本部・・・生徒会役員がトランシーバを携帯して各班の進行状況を把握し、本部に情報を集約。この情報をもとに、計画通りに訓練を進行・実施していたが、炊き出し調理が20分程度の遅れが生じることが分かった。このため、本部と協議して生徒会役員は、10:30から開始した1テーマ15分ずつのポスターセッションを11:30から11:45の1テーマ分を追加することを決め、遅れの時間を調整している。この突然の事態にも、生徒会役員は的確な対応を取り、本部につめて逐次、相談・報告を受けていた町内会長の皆さんは、臨機応変に適切で迅速な決定にあらためて感心していた。



2、訓練準備・実施計画

南吉成中学校校区・青少年健全育成協議会には、事前に説明と検討を行い、以下の計画で地域防災訓練を実施することに理解を求めている。

月 日	実 施 内 容
5月28日	拡大・健全育成協議会(例会と地域防災訓練の概要説明)、MY・SP隊の発足
8月26日	全校生徒に地域防災訓練の実施説明
9月24日	拡大・健全育成協議会(訓練概要と協力依頼の説明等)
25日	○生徒会役員に地域防災訓練の概要を説明・質疑
26日 ～	○生徒会役員がポスターセッションのテーマ毎の担当者と発表者、そして訓練で担当する班員を選出・決定
10月9日～	○生徒会役員が、3年生に地域防災訓練の内容等を説明し、訓練の班編成とその班員、ポスターセッションのテーマ学習担当者と発表者を決めて報告 ○テーマごとの準備活動(模造紙・作成、発表原稿など)
28日	○生徒会が防災訓練の班の活動内容を説明、 ○班毎に計画・内容等の検討とその準備活動
11月11日 ～	○班ごとの活動計画・内容の確認 ○班毎で準備活動を継続
11月14日 (6校時)	各班を担当する生徒たちが、班毎に学校支援組織の担当者に班活動の計画・内容と訓練活動を説明して検討・協議
11月15日	地域防災訓練・当日
18日 ～	○アンケート調査等の実施 ○成果や課題の分析とまとめ
2月中旬	報告書等の成果物の作成・公表

	<p>準備活動の様子《写真》</p> <p>○9月25日 生徒会役員に訓練概要を説明</p>  <p>○10月9日 テーマごとの準備活動</p>  <p>○10月28日 生徒会が班活動の説明</p>  <p>○11月11日～ 班毎の検討会・準備活動</p>  <p>○11月14日 各班生徒たちが、学校支援組織の担当者に活動内容を説明して最終検討・協議</p> 
<p>準備、使用したもの・人材・道具、材料等</p>	<p>○人材 学校支援組織、消防団、仙台北警察署、宮城教育大学、市民センター、仙台市教育委員会など</p> <p>○道具 非常災害備蓄食・備品等、トランシーバー、救急用品、プロジェクターなど</p>
<p>参加人数</p>	<p>中学生320人、学校支援組織と地域住民等209人、教職員26人</p>
<p>経費の総額・内訳概要</p>	<p>約555人分の炊き出し食材費：総額90,628円 カレーライス 55,580円、豚汁 35,048円</p>
<p>成果と課題</p>	<p>4、アンケート調査の結果・分析について</p> <p>平成25年11月15日(金)に実施した「中学生が主導する地域防災訓練」のアンケート調査を、以下のとおり実施し、その調査項目の内容と集計結果を表に示す。</p> <p>①調査日 中学生：11月18日(月)、 地域住民等の参加者：11月15日(金)</p> <p>②調査方法 4件尺度法による質問紙調査</p> <p>③調査対象 中学3年生103人、2年生96人、1年生102人、参加者70人</p> <p>《調査結果について：次項の集計結果表を参照》</p> <p>選択肢“大いに”と“まあまあ”を加えた割合は全ての調査項目で9割を超えており、「中学生が主導する地域防災訓練」が全ての調査内容において良好な成果や効果が得られたことを示している。</p> <p>選択肢“大いに”に着目すると、3年生は NO3「中学生が主導する</p>



地域防災訓練により、中学生は地域防災に貢献できる」88.3%、NO2「地域だけの訓練に比べ、学校と地域が一緒になって、防災訓練を行う必要がある」84.5%、NO7「中学生と学校が地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる」84.5%であり、中学生の地域貢献を自ら評価し、学校と地域が一緒に協力して訓練を行う必要性を強く認識していることが分かる。地域等の訓練参加者については、NO10「地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる」88.6%、NO1「本日の訓練に限らず、地域で行う防災訓練は必要である」87.1%、NO7「中学生と学校が地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる」80.0%であり、防災教育の重要性と訓練の必要性、中学生や学校との協力を求めていることが分かる。主に避難者役として参加した1・2年生については、NO4「本日の訓練で活動・体験して、良かった・ためになったと感じる」、NO5「実際に大震災が起きた場合、地域防災訓練は役立つと思う」、NO7「中学生や学校が地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる」がいずれも78.3%であることから、特に訓練の成果を感じ、実際に役立つこと、そして中学生・学校・地域が協力することの必要性を学んでいる。

NO	調査項目の内容	対 象	大いに	まあまあ	あまり	ぜんぜん
1	本日の訓練に限らず、地域で行う防災訓練は必要である	3年生	80.6	18.4	1.0	0
		参加者	87.1	12.9	0	0
		1・2年生	74.6	22.5	2.3	0.6
2	地域だけの訓練に比べ、学校と地域が一緒になって、防災訓練を行う必要がある	3年生	84.5	13.6	1.9	0
		参加者	75.4	24.6	0	0
		1・2年生	74.4	23.3	1.7	0.6
3	中学生が主導する地域防災訓練により、中学生は地域防災に貢献できる	3年生	88.3	11.7	0	0
		参加者	78.6	20.0	1.4	0
		1・2年生	75.1	22.0	2.8	0
4	本日の訓練で活動・体験して、良かった・ためになったと感じる	3年生	78.6	21.4	0	0
		参加者	58.6	37.1	4.3	0
		1・2年生	78.3	20.0	1.7	0
5	実際に大震災が起きた場合、地域防災訓練は役立つと思う	3年生	68.6	26.5	4.9	0
		参加者	75.4	24.6	0	0
		1・2年生	78.3	17.2	4.4	0
6	中学生が主導する地域防災訓練は、毎年、実施する必要がある	3年生	61.2	35.0	3.9	0
		参加者	60.9	34.8	4.3	0
		1・2年生	61.9	32.6	5.0	0.6
7	中学生や学校が地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる	3年生	84.5	15.5	0	0
		参加者	80.0	20.0	0	0
		1・2年生	78.3	19.4	1.7	0.6
8	地域や学校が一緒に様々な活動や取組を行うことは、地域活性化につながる	3年生	71.8	25.2	2.9	0
		参加者	78.6	18.6	2.9	0
		1・2年生	74.4	22.8	2.8	0
9	本日の訓練は、地域と生徒の関わりを深めると感じる	3年生	74.8	20.4	4.9	0
		参加者	67.1	25.7	7.1	0
		1・2年生	72.8	20.0	7.2	0
10	地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる	3年生	84.3	15.7	0	0
		参加者	88.6	11.4	0	0
		1・2年生	77.1	21.2	1.7	0
11	地域と学校が一緒に取り組む活動が増えると良い	3年生	81.4	16.7	2.0	0
		参加者	71.4	28.6	0	0
		1・2年生	74.4	23.3	1.7	0.6



しかし、選択肢“大いに”における3年生と参加者の差では、NO4「本日の訓練で活動・体験して、良かった・ためになったと感じる」20%の開きがあり、3年生ほど参加者は訓練の成果や効果を評価していない。また、NO11「地域と学校が一緒に取り組む活動が増えると良い」10%の差、NO3「・・・中学生は地域防災に貢献できる」9.7%、NO2「・・・学校と地域が一緒になって、防災訓練を行う必要がある」9.1%の差になっており、3年生より参加者は多少、学校への期待感が薄いことも判明している。このことは“防災訓練は大人がやること”等の固定観念が存在していることも想定される。この払拭も今後の課題とも考える。

次に、3年生だけについて、調査項目間の相関分析を行い、その結果を以下に図示する。相関係数については、0.60以上の“相関が認められる”と0.70以上の“強い相関がある”項目間を抽出している。強い相関を示した項目間は、次の2つである。

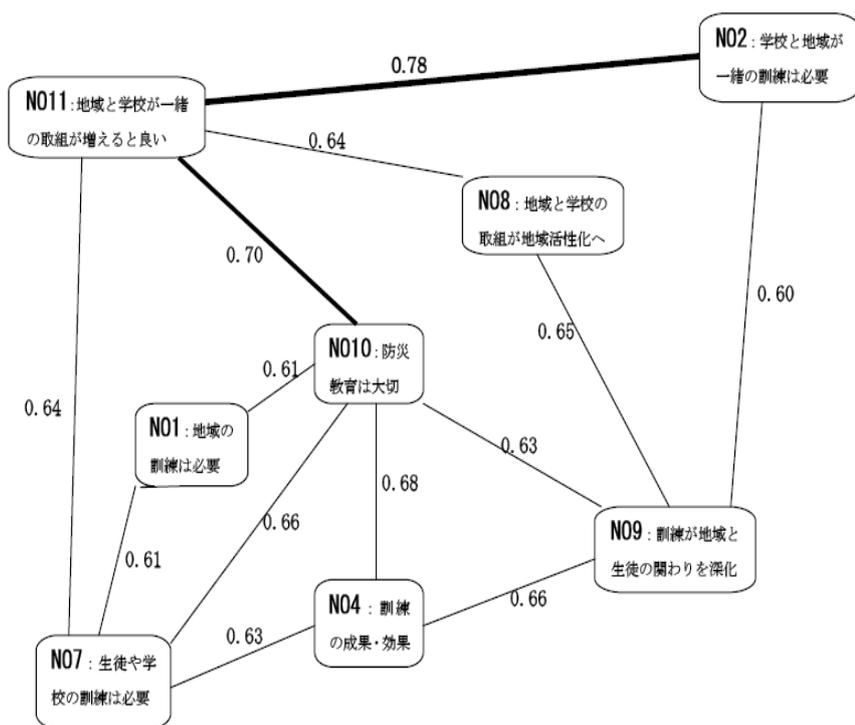
①相関係数 0.78

NO11「地域と学校が一緒に取り組む活動が増えると良い」と
NO2「地域だけの訓練に比べ、学校と地域が一緒になって、防災訓練を行う必要がある」

②相関係数 0.70

NO11「地域と学校が一緒に取り組む活動が増えると良い」と
NO10「地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる」

これらの相関関係からは、地域防災訓練の必要性和防災教育の重要性から、地域と学校が一緒に取り組む活動を増やすことが、3年生は強く認識していることが分かる。



上記の相関図からは、NO10“防災教育の大切さ”を核としてNO1、NO4、NO7、NO9、NO11と相関が認められている。このことは、防災教育を通じて、防災訓練の必要性和その効果・成果を高められ、地域と生徒の関わり・つながりが深まり、地域と学校の連携が図られる、そして、学校と地域の取組が増えることで地域の活性化にもつながる、ことを潜在的に認識・意識化しているものと考えられる。

成果物

平成25年度の報告書「中学生が主導する地域防災訓練」
防災教育テーマ別のポスターセッション用掲示物
集団避難経路図などの防災関係の学習成果物 など



4. 苦勞した点・工夫した点

<p>プランの立案と調整で苦勞した点 工夫した点</p>	<p>(1) 学校と生徒が有する防災対応・対策機能やスキル能力の現状と可能性の追究：プラン立案において、現状分析と可能性の追求に基づき、構想</p> <p>(2) 地域の特性や実態を把握し、それらを生かした創意・工夫ある実践可能なプランの策定</p> <p>① 地域特性として、学区は都市部近郊の丘陵地帯に位置し、二十数年前に山林を開拓した新興住宅地。このため、地域の伝統文化がなく、住民間の関係性も強くないベッドタウン化。少子高齢化と核家族化が進む。</p> <p>② この現況と課題を克服、または逆に生かす防災教育の取組方法を模索。</p> <p>(3) 地域特性を考慮し、構想する防災教育実践プランの条件設定を考察・設計：○プラン内容によって、条件適合する地域の多彩な人的教育資源の活用方法。○平日・休日による不在年齢層の相違条件に基づく防災訓練。○地理的・地形的条件(都市部近隣・新たに開拓された団地・起伏ある丘陵地帯等)設計による防災訓練の構築。など</p> <p>(4) 組織的、系統的、計画的、継続的な防災教育を実践し、プランの汎用性、継続性、発展性、有効性等を追究・検証できるプランとカリキュラムの構築を目指す</p> <p>(5) 新たな防災教育を構想・実践するため、教職員や保護者の意識と理解、協力と連携が不可欠：プラン構想段階から周知と協議・検討の積み重ね。</p>
<p>準備活動で苦勞した点 工夫した点</p>	<p>(6) 防災教育では地域防災力の向上を図って、その成果や効果を追求するために必要なファクターとして、可能な限り、地域の組織・機関・団体を巻き込む必要がある。：より多くの地域の組織等と連携・協力を得るためには、交渉や説明などに、時間や調整に手間取る。</p> <p>(7) 学校や地域が求める防災を推進するためには、地域特性が抱える課題や問題を解決する内容と方法・手段を、準備活動をしながら模索し、プランの逐次改善を図る必要がある。：例えば、住民の関係性の希薄化により、防災の実践化に支障があれば、学校と中学生が住民と戦略的に関わる(奉仕活動)ことで、住民間の繋がりを促し、段階的に実践を展開・拡充する。</p> <p>(8) より成果や効果を高めるため、教育実践に協力・支援する地域人材を掘り起こす。：地域の人的教育資源の情報収集を、住民間のネットを活用。</p> <p>(9) 多様な年代層の住民と関わることで、生徒の社会性を培う。：生徒が様々な年代の住民と防災訓練を行うことで、年代を超えた議論や理解が得られ、異年齢交流を図ることができる。</p> <p>(10) 学校や地域が、防災教育を推進するために必要な予算措置がない。：学校が予算獲得するために防災教育チャレンジプラン等に応募して予算確保。</p>
<p>実践に当たって苦勞した点 工夫した点</p>	<p>(11) 新たな教育実践を始めるに当たり、保護者に理解や協力を得るため、事前アンケート調査を実施し、阻害要因の解消を図る。</p> <p>① 津波被災地の農家を支援する奉仕活動では、保護者が津波の再襲来を心配して活動に反対したり、真夏の除草作業で熱中症を懸念したりなど、事前調査から課題把握できた。そこで、再襲来時の避難ルートや被災地周辺の病院とその移動ルート・時間などを、現地の下見と病院への依頼等により、対応策を周知して課題を払拭している。</p> <p>② 中学生が主導する地域防災訓練の実践では、中学生には難しい取組、学力向上に時間を使うべき、これまで通りでよい、などの事前調査から意見を集約している。これらの意見についても、保護者に理解をいただくためにPTA集会等で説明と協力を仰いだ。</p> <p>(12) 学校支援組織には老人会など、高齢の方々も支援していただいております、防災教育の実践について説明や依頼などしている。しかしご理解ご支援をいただくまで、分かりやすく丁寧な説明が幾度となく必要になった。</p> <p>(13) 地域防災訓練の当日に、炊き出し食材が時間になっても届かず、依頼業者に連絡をすると正式な依頼がなかったとの返答。しかし事前に、何度も見積依頼をやり直していた経緯から、時間は遅れたものの当日に再依頼して食材を搬入ができた。生徒たちは臨機応変に対処して事態回避。</p>

5. 他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・ 同窓会組織	宮城教育大学・教育復興支援センター	中学生が主導する地域防災訓練の指導・助言
	仙台市教育委員会・教育指導課	中学生が主導する地域防災訓練の視察と指導・助言
	筑波大学人間系教育学域	本校の防災教育と中学生が主導する地域防災訓練の視察
	神戸市立住吉中学校	地域防災訓練後に開催した防災教育講演会・講師
	東北学院大学教養学部人間科学科	防災教育の成果発表の事前指導・助言
保護者・ PTAの組織	本校の父母教師会・本部役員	生徒とともに津波被災農家の奉仕活動、地域防災訓練の支援
	健全育成委員	
	各地区委員	生徒とともに津波被災農家の奉仕活動、地域防災訓練の支援と参加
本校の保護者		
地域組織	本校の学校支援組織「MY・SP隊」	中学生が主導する地域防災訓練の視察と支援と助言
	吉成防犯協会	
	交通安全協会	
	吉成交通指導隊	
	南吉成学区民・体育振興会	
	吉成地区老人クラブ連合会	
	吉成老人会、南吉成老人クラブ、五葉会、さつき会、中山吉成老人クラブ	
	民生児童委員	
町内会(南吉成、中山吉成、吉成、西吉成、権現森山町、中山台西町)		
国・地方公共団体・ 公共施設	吉成市民センター	中学生が主導する地域防災訓練の視察と支援と指導
	仙台北警察署	
	南吉成交番所	
	仙台宮城消防団	
	南吉成地区社会福祉協議会	仙台復興シンボルイベント奉仕活動の協力
	南吉成コミュニティセンター	
	仙台北地区防犯協会連合会	
	仙台市農業園芸センター	
企業・ 産業関連の組合等	宮城生協・国見ヶ丘店	中学生が主導する地域防災訓練の支援
	仙台一番町四丁目商店街振興組合	仙台復興シンボルイベント奉仕活動の協力
	(株)荒浜アグリパートナーズ	津波被災農家の奉仕活動・支援
ボランティア団体・ NPO法人・NGO 等	中山吉成婦人防火クラブ	地域防災訓練の支援
	公益財団法人JKA	津波被災農家支援等で教育助成
	公益財団法人 国際開発救援財団	
	仙台いきいき青葉区推進協議会	仙台復興シンボルイベント奉仕活動の協力
職業、職能団体・ 学術組織、学会等	なし	



6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

<p>成果として 得たこと</p>	<p>本プランは地域組織を活用して学校支援組織を発足させ、その支援を受けて中学生が主導する地域防災訓練を行うことに特徴がある。その成果としては、</p> <p>①中学生が主導することにより、地域防災を担う人材が育成され、将来的には地域に根付く防災・減災の文化化が図れる。</p> <p>②地域組織による学校支援は、防災教育を切り口として地域を巻き込む教育実践となり、学校・地域・家庭が連携した取組に進化することができる。このことにより、着実に地域防災力の向上が図れる。</p> <p>③主に担当する管理職や教員が転勤しても、中学生が主導し、学校支援組織が関わる地域防災訓練は、継続して実践され続ける可能性が高い。</p> <p>④本プランは多様な地域特性を活かせる防災教育実践として汎用性がある。</p> <p>⑤中学生と住民はともに、防災における中学生の地域貢献度を高く認知し、ともに防災教育を推進することで地域活性化につながるものと期待している。</p> <p>さらに、防災教育に係る実践プログラムからは、次の成果を得ている。</p> <p>⑥津波被災農家の弟子入り体験学習では、被災地復興に自分の力を活かしたい、役立ちたい、何ができるか考えたいとほぼ全ての生徒が思いを抱き、助け合い・支え合いの大切さ、苦難を乗り越える努力の必要性など、体験から奉仕の心とその意欲、さらには生き方をも学び取ることができる。</p> <p>⑦炊き出し調理コンテストでは、生徒の防災スキルを高めるだけでなく、ほぼ全ての生徒が食べる人々に生きる勇気と希望を与えられると理解している。</p> <p>⑧被災地視察では、同じ市内でも生徒たちの住む地域との被害の違い、仮設住まい等の現況を知り、被災者の心情を理解し、教訓の風化を防ぎ、継承する責務を改めて痛感している。</p> <p>⑨生徒たちは体験的な防災教育実践において思考、判断、表現の学習プロセスを繰り返し、学び取った防災教育の結果や成果を外部発信することにより、他校や他地域等で活かせる成果物を提供する。（ユネスコスクール活動）</p> <p>⑩“仙台の復興は自分たちの手で”を合言葉に、生徒たちは奉仕活動を通じて仙台復興のPRに尽力し、積極的に地域貢献を果たしている。</p>
<p>全体の反省・ 感想・課題</p>	<p>本プランは中学生が防災教育を学ぶことだけに止まらず、地域住民を取り込む形に展開しつつあり、中学生が地域防災の要としてその役割が大いに期待できるものに発展してきている。このことは、中学生が地域への奉仕活動や地域に役立つ防災活動を行うことで、地域住民と一緒に防災教育を学ぶことにその成果や効果が起因しているものと考えられる。さらには、中学生と地域住民の取組が相乗効果を生み、地域防災力の向上につながるものと考えている。そこで、より発展的な実践プランの改善・創出も、今後検討していく必要があり、中学生が地域防災力の向上のため、どのような実践プログラムに改良すべきかが問われていると考える。</p> <p>また、もう一つの課題は、被災農家の体験学習に保護者の参加を募り、中学生と一緒に奉仕活動や農家との交流を図ろうとしている。しかし、参加する保護者は十数名程度であり、貸切バスに空席がある。保護者の参加者数を増やすためだけでなく、より多くの保護者が中学生と一緒に体験を積み、被災者と交流することで保護者とともにも中学生もさらなる変容が期待できるものと考えている。そこで、来年度には実施前に調査し、原因を抽出してその解決を図り、多くの保護者が参加して生徒たちと一緒に体験学習に望みたいと考えている。</p>
<p>今後の 継続予定</p>	<p>(1)中学生が主導する地域防災訓練：今年度は全校生徒 320 名、教職員 26 名、支援組織と地域住民 209 人の計 555 人が参加している。次年度には隣接する小学校の高学年約 100 名を加え、今年度の課題の解決策を実施して訓練成果や課題などを追究する。</p> <p>(2)津波被災農家に弟子入り体験学習：H24 に 1 年生、H25 に 1・2 年生が参加しており、H26 には全校生徒 320 名が参加して実施する予定である。課題である保護者の参加を約 100 名にし、事前調査で参加出来ない理由の払拭を図る。</p> <p>(3)本校の防災教育の外部発信：本校の実践成果を生徒と教員が外部発信し、他校等でも実践できる報告成果物を説明・提供する。</p> <p>(4)他県の中学校との交流学习：三重大付属中、神戸市立住吉中と交流予定</p>

7. 自由記述欄 ※6

※6 自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守をお願いします。

1. 本プランの汎用性と継続性の追究

「中学生が主導する地域防災訓練」は、本校校長がこれまで赴任した3つの中学校で実施している。この訓練は、中学生が次に示す6つの班に分かれ、地域の既存組織を活かして学校支援組織を発足させ、中学生の各班を学校支援組織が分担して補佐・支援して行うものであり、中学生が主体となって実施訓練する。

【生徒の活動班】①避難所設営・運営班、②集団避難・誘導班、③炊き出し調理班、
④保健・救急救護班、⑤災害状況・情報収集班、⑥災害対策本部

以下の表は、これまで本訓練を行ってきている学校と地域の実態と、訓練の継続状況をまとめたものである。この表から、本訓練は多様な実態の地域や学校において実施できることが分かり、本プランが汎用性を持ち得ているものであると考える。

学校名	地域特性の概要	生徒数	学校支援組織	生徒主導の地域防災訓練
A中 (丸森東中)	中山間地域で、少子高齢化と過疎化、兼業農家が多い	約 50人	丸東・改援隊 (隊長：PTA会長) (名誉隊長：公民館長)	H21～H22 (H24.3廃校)
B中 (金ヶ瀬中)	県南の中心地近郊で、跡継ぎ不足で農業が衰退	約 100人	金未来隊 (隊長：公民館長)	H22から継続実施
C中 (南吉成中)	仙台近隣の丘陵地で、大規模宅地開発されて二十数年経過	約 320人	MY・SP隊 (隊長：連合町内会長)	H25から実施

また、本プランの継続性については、B中がH22年度から継続して実施されているものの、A中については廃校となり途絶えてしまった。

A中はH23.3.11の大震災で校舎に亀裂が入って使用できなくなり、H23の4月の学校再開はA中から約6km離れた中学校の教室を間借りして授業を始めることになった。このため、H21から行っていた「中学生が主導する地域防災訓練」はH23年度から出来なくなり、H23年度末にA中は統廃合により廃校となった。このことを鑑みて、A中については大震災がなければ、本訓練が継続して実施された可能性が高いものと考えられる。

以上のことから、A・B両校の実施状況を踏まえ、中学生が主導して学校支援組織が補佐・支援する地域防災訓練には、継続性があるものと考えられる。

今後、本プランの汎用性と継続性については、C中でもH25年度から本プランを実施していることもあり、さらに追究していく。そして、本プランにおいては、汎用性と継続性に必要な要因・要素を今後とも明らかにしていく。

(自由記述：1/3)

2、本プランの有効性と発展性の追究

本プランにおいて、これまで3校で行ってきた実践プログラムのねらいや実践概要について以下の表にまとめる。なお、本プランのメインはN4「中学生が主導する地域防災訓練」であり、その実施に当たっては地域の既存組織・団体等からなる学校支援組織を発足させ、中学生の訓練実行班を分担して補佐・支援するものである。

そこで、生徒が科学的知見や教訓から震災を学び、復興支援等を体験的に経験しながら大震災で何が起きたかを知り、そのためにどのような備えが必要かを考え、体験学習によってそのスキル等を習得する。この学習プロセスを受けて、知識やスキル、関心や意欲を高め、中学生が主導して地域防災訓練を行う。これらのことにより、訓練の成果や効果は向上するものと考え、本プランが有効性を持ち得ることを確認できると考える。

※ ○：A中で実施、△：B中で実施、□：C中で実施

N	実践プログラムのねらい		実践概要
1	震災を学ぶ	地震(津波)を学ぶ	東北大学地震・噴火予知研究観測センター長の講演 ○△
		大震災の教訓を学ぶ	津波被災農家の方々の講演 □
2	大震災を知る	大震災の復興支援活動を通じて	津波被災中学校の復旧支援活動 △ 津波被災農家に弟子入り体験学習 □ 仙台復興シンボルイベントを支える奉仕活動 □
3	震災に備える	備蓄食材の栽培加工	農家に弟子入り体験学習 ・手作業で稲作(田植え、除草、稲刈り、はさがけ、脱穀) ○△ ・梅干し加工(収穫、天日干し、シソ漬け) ○△ ・みそ造り(大豆の種まき、除草、収穫、大豆からみそ加工作業) ○
		防災スキルを学ぶ	校内・炊き出し調理コンテスト □
		地域特性を知る 備えを調べる	ハザードマップを作成 ○ 10のテーマ別・調査学習 □
4	訓練を行う	訓練の支援準備 中学生が行う	支援組織を立ち上げる： 地域が有する組織・団体等と連携して発足 中学生が主導する地域防災訓練 中学生が5班編成して、組織が分担支援
5	実践を広める	地元の町へ ○ 外部へ ○△□	町議会堂で模擬議会(防災関係議案の質疑) 防災教育チャレンジプラン ユネスコスクール加盟校(A、B、C中ともに加盟) ぼうさい甲子園などで発信
6	評価・改善する	自己評価分析 外部評価	実践に当たってはアンケート調査等を行い、データ分析し、PDCAマネジメントサイクルを実行 N5の三者等による評価

また、メインの実践プログラムN4の有効性を高めるためには、N4以外のサブとなる実践プログラムが地域特性や震災の現状等を踏まえ、中学校の実態に即して適切で創意ある実践を行う必要がある。このことは、サブとなる実践プログラムが多彩な取組になることで、本プランにおいてさらに発展性をもたらすものと考え。

メインの実践プログラム「中学生が主導する地域防災訓練」自体の発展性については、次の表に示すように、実施条件の設定によって多様なタイプに分類できるものと考え、タイプに応じて実践の難易性を高めることで、発展性が大いに見込める。

訓練タイプ	日		時		季節				学校		訓練参加者							
	平日	休日	昼間	夜間	春	夏	秋	冬	開	閉	中	小学校			PTA	組織	地域	自由
タイプA	○		○				○		○		○				○	○	○	
タイプB	○		○				○		○		○	○			○	○	○	
タイプC		○	○				○		○		○	○	○	○	○	○	○	
タイプD	○			○			○		○		○	○			○	○	○	
タイプE		○	○				○		○		○	○	○	○	○	○	○	○

※1、組織：学校支援組織MY・SP隊、※2、自由：訓練当日に事前申込無しで参加

(自由記述：2/3)

3、本プランの成果・効果や課題の検証

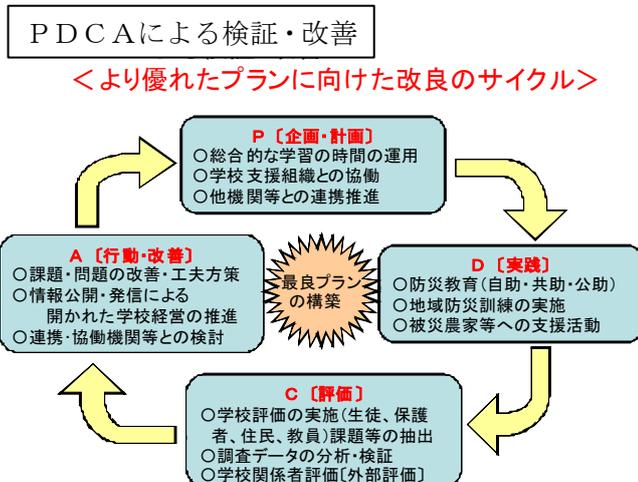
これまで「中学生が主導する地域防災訓練」は、3つの中学校で実施しており、その中学生に行ったアンケート調査から本プランの成果等を分析してみる。

NO	調査項目の内容	学 校	大いに	まあまあ	あまり	ぜんぜん
1	地域だけの訓練に比べ、学校と地域が一緒になって、防災訓練を行う必要がある	C 中	84.5	13.6	1.9	0
		B 中	54.5	42.0	2.3	1.1
		A 中	80.9	14.9	4.3	0
2	中学生が主導する地域防災訓練により、中学生は地域防災に貢献できる	C 中	88.3	11.7	0	0
		B 中	19.3	71.6	8.0	1.1
		A 中	51.1	48.9	0	0
3	本日の訓練で活動・体験して、良かった・ためになったと感じる	C 中	78.6	21.4	0	0
		B 中	43.7	47.1	6.9	2.3
		A 中	61.7	38.3	0	0
4	実際に大震災が起きた場合、地域防災訓練は役立つと思う	C 中	68.6	26.5	4.9	0
		B 中	35.2	53.4	8.0	3.4
		A 中	61.7	34.0	4.3	0
5	中学生が主導する地域防災訓練は、毎年、実施する必要がある	C 中	61.2	35.0	3.9	0
		B 中	44.2	47.7	7.0	1.2
		A 中	53.2	38.3	8.5	0
6	中学生や学校が地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる	C 中	84.5	15.5	0	0
		B 中	59.1	39.8	0	1.1
		A 中	72.3	27.7	0	0
7	地域や学校が一緒に様々な活動や取組を行うことは、地域活性化につながる	C 中	71.8	25.2	2.9	0
		B 中	45.5	51.1	1.1	2.3
		A 中	59.6	40.4	0	0
8	地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる	C 中	84.3	15.7	0	0
		B 中	42.0	46.6	9.1	2.3
		A 中	65.2	34.8	0	0

選択肢“大いに”と“まあまあ”をあわせた割合については、どの項目でも9割程度を占めており、3つの学校の中学生は地域防災訓練を良好に捉えていることが分かる。特に、C校については、選択肢“大いに”の割合が高くなっており、大震災後の実践プログラムの実施により、その成果や効果が影響しているものと考えられる。逆に、B中においては選択肢“大いに”の割合が他校と比べて低くなっており、慎重で過小評価しがちな地域性による生徒の性格的特性が表出しているものと思われる。なぜなら、B中の生徒たちはどの防災教育の実践プログラムにおいても、熱心に真剣に取り組み、その成果や効果も大いに得ているからである。

これらのことから、本プラン（メインとサブを含める）は汎用性、継続性、有効性、発展性において、防災教育の実践として評価できるものとする。今後、本プランの実践を続ける中で、さらに、検証の方法として相関分析や因子分析などの分析手法を用い、経年比較による詳細な分析から成果や課題等が検出できるものとする。そして、図に示すように、より優れたプランの実現に向けてPDCAマネジメントサイクルにより、実践、評価、検証、改善、そして企画・計画を繰り返していくことが重要であり必要と考えている。

最後に、今から未来に向け、防災教育を継続することは、地域防災力が偉大なる力(共助を含め、地域の安全・安心と人の絆を司るパワー)に進化すると確信している。



(自由記述: 3/3)